



会員相互の交流を深めながら、生涯学習の充実を目指して努力して参りたいと思います。



沖縄県内科医会 会長
伊集 守政 先生

P R O F I L E

Q1. 内科医会会長になって一年を経過致しましたが、振り返ってみて、この一年はいかがでしたか。

8年間会長をお務めになった中村義清先生の後任として、昨年、私が選任されました。長い間、会の運営に関わってきたということでお鉢が回ってきたようです。伝統ある内科医会の会長を私で務まるかとの不安もありましたが、幸い、中村会長時代の理事が全員留任し、新たに30代の新進気鋭の先生も加わり、全面的にバックアップをして頂き、なんとか、一年が経過致しました。

振り返ってみて、内科医会には、専従の事務局員がないので、理事会のセッティングや県医師会との連絡事項など結構細かい仕事があるものだという印象です。

1年間はあっという間に過ぎましたが、今後は、組織としての内科医会をどうするかという事も含めて、理事会で議論しながら、会の目的である『会員の生涯教育、地域医療、医療経営、医政についての研究及び会員相互の親睦を図る』の実現を目指して、努力して参りたいと思っております。

Q2. 内科医会の活動内容をご紹介していただけますでしょうか。

内科医会の活動としては、まず、第一に会員

昭和45年3月	北海道大学医学部卒業
4月	北海道大学医学部第二内科勤務
昭和46年4月	旭川市立病院内科勤務
昭和48年4月	北海道大学医学部第二内科勤務
昭和50年1月	江別市立総合病院内科勤務
昭和53年4月	県立那覇病院内科勤務
昭和57年4月	西武門病院内科勤務
昭和61年2月	伊集内科医院 開設
平成5年4月	沖縄県内科医会理事就任
平成8年4月	那覇市医師会理事就任
平成11年4月	沖縄県内科医会副会長就任
平成14年4月	那覇市医師会副会長就任
平成17年4月	日本臨床内科医会理事就任
平成19年4月	沖縄県内科医会会長就任

のために、臨床に直結した講演会や実技指導講習会等を実施する事です。数多くある他の講演会と一味違ったテーマの選定に学術担当理事を中心に知恵を絞り、年に数回程度実施しております。

毎月、定例理事会を開き、次のような県医師会関連事項等の協議をしております。

県医師会医学会総会の特別講演、シンポジウム、ミニレクチャーの演題の提案及び座長の推薦、県医師会報学術原稿執筆者の推薦、社保・国保の診療者代表保険審査員の推薦、沖縄県関

連の各種委員の推薦等があります。さらに、沖縄県内科医会は日本臨床内科医会の県支部としての活動もあり、九州各県持ち回りで毎年開催される日本臨床内科医会九州ブロック会議、九州各県内科医会連絡協議会、九州各県内科審査委員懇談会は重要な活動で、協議題を提出し殆どの理事が参加しております。その他、日臨内の「インフルエンザの予防・診断・治療に関する全国調査研究」等への参画や日臨内の専門医・認定医の第一次審査も行っております。

Q3. 内科医会は県医師会の分科会でも一番の大所帯と伺っておりますが、現在の会員数は?また、会の運営にあたってご苦労があればお聞かせ下さい。

現在の会員数は150名前後です。そのうち1割が勤務医です。九州各県の内科医会と比べると、当県の組織率はまだ低い方で、もっと多くの内科系の先生方に入会してほしいと思っております。

会の運営で気を配っていることは、他にいくつもの学会に所属している会員の先生方に対して、内科医会として如何に独自性を発揮し、新鮮味のある講演会や講習会を企画するかという事です。理事会でも常に議論しておりますがなかなか難問です。今年、新しい取り組みとして、開業医にとって身近な問題である保険診療に関する勉強会の企画も考えております。また、当会の大きな目的である「会員相互の親睦」をどのように図っていくかも、今後の会の運営上の課題です。

Q4. 内科医会会長としては、多くの会員の意見を集約し、県医師会にも様々なご提言を頂いておりますが、今後県医師会との連携をどのようにお考えでしょうか。

私は、各分科会は地区医師会と異なり、県医師会の学術団体としての機能を分担していると捉えております。県医師会と緊密な連携を保ち、その機能を十分発揮するためには、組織率の更なるアップが望まれます。現在、分科会そ

のものが県医師会員に十分に認知されていないようで、各分科会への入会の方法も定まっておりません。執行部には、県医師会入会時に分科会の存在を紹介し、是非、同時入会を勧めるよう要望致したい。分科会の組織率が向上し活性化すれば、県医師会の学術団体としての存在が更に明確になることでしょう。

Q5. 伊集先生は、沖縄県医師会館建設に関して、会館建設検討委員としても多くの助言を頂いております。新会館建設に関して、分科会活動や会員活動の拠点としてどのような期待を寄せられているかご意見をお聞かせ下さい。

内科医会に関して言えば、現在、県医師会館の中にスペースが無いため、事務局を那覇市医師会の中に間借りし、事務的な仕事の一部を那覇市医師会職員にお願いしております。新医師会館が完成したら、当然、これらの機能は県医師会に集約されるべきだと思っております。九州各県の状況を見ても分科会の事務局は県医師会館の中にあり、県医師会職員が庶務関係をサポートしております。また、新医師会館が完成したら、現在、ホテルなどで行われている各分科会主催の講演会は県医師会館で行う機会が多くなることが予想され、しかも、殆どが平日の時間外や土日の開催になると思われれます。県医師会執行部には、これらの分科会活動がスムーズに行われるよう事務局の支援体制の整備をお願い致したい。分科会活動のサポート体制が充実すれば、医師会館建設費を負担している会員への目に見える形での還元となり、沖縄県医師会への求心力は更に高まると思われれます。

Q6. 今年度から、特定健診が始まり、メタボリック症候群対策をはじめ、内科医会の活躍が大いに期待されておりますが、今後の活動に関してなにか期するものがありますか?

特定健診、特定保健指導に関しては、全国的には、国の低医療費政策の現れだとして必ずしも評価しない向きもありますが、沖縄県は、ご承知の通り、肥満が多く、同時にメタボリック

症候群の頻度も全国一であります、その結果、県民の健康が青壮年を中心に急速に蝕まれてきております。私共はこの現状に鑑み、特定健診には積極的に関わるべきと考えております。

那覇市の資料によれば、那覇市民の早世（65歳未満の死亡）は、男女とも全国平均を上回っており、原因として虚血性心脳血管疾患の多発があげられ、背景には、未治療の高血圧症、糖尿病等の存在があります。今回の県、市町村、企業など保険者が取り組む特定健診は、メタボリック症候群の抽出のみに留まらず、未治療のまま放置されている高血圧症、糖尿病などの疾病の発見、治療にも繋がり、この点でも意義は深い。特に、これまで疾病が潜在している可能性が高いが、殆ど健診を受けてない40～50代の男性が健診を受け、自身の健康管理を自覚する機会になればさらにその意義は大きい。

昨今、「長寿県の復活」の議論が盛んですが、私は沖縄県にとって「健康長寿の復活」は「早世への対策」が最優先課題だと捉えております。その具体的な一歩となりうる今度の特定健診は内科関連施設に限らず、多くの医療機関で実施すべきで、更に、受診者の利便性のため、地区医師会においては、休日の集団健診の実施も考慮してよいのではと考えます。内科医会としても協力は惜しまないつもりです。

Q7. 一昨年大きなご病気をされたとお聞きしましたが、ご自身が病気を患ったことで感じたことがありましたらお聞かせ下さい。

開業して21年間、「全くの病気知らず」でしたが、この度は、ひと月の病気療養を余儀なくされ、日常診療の継続に大変な不安を覚えました。幸いに、私の場合は、那覇市医師会と病診連携ネットワークを組む2ヶ所の地域支援病院が全面的にバックアップしてくれたおかげで、患者さんに不便をかけることなく診療体制を維持することができました。双方の病院の先生方や連携室のスタッフの皆様方には心から感謝致しております。私自身、普段から、連携医療の重要性を考え、那覇市医師会の病診連携事業には積極的に取り組んできましたが、この度は、改めてその大切さを痛感致しました。

開業医の平均年齢は60歳前後で、会員の多くが健康に不安を覚える年齢になっております。日常の健康管理に気を配ると同時に不測の事態への備えも必要です。「開業医は病気をしたらおしまいだ」ではあまりにも策がなさ過ぎます。病診連携を核にして、地区医師会の関与したセフティーネットの構築は重要な課題と考えます。

インタビューアー：広報委員 池村 剛

原稿募集！

プライマリ・ケアコーナー(2,500字程度)

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。
奮ってご投稿下さい。